
たとえモテなくとも朝日は昇るんだぜ，覚えとけ

maki

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえモテなくとも朝日は昇るんだぜ -覚えとけ

【Zマーク】

Z9686Q

【作者名】

maki

【あらすじ】

なぜだか異性に嫌われまくっている石田恭平、リア充くたばれと言つだけの人生を送つてきた彼だが……

本来はバレンタインデー特別企画として投稿するつもりでしたが予定が重なりまくったせいでこんなに遅れてしまいました……

バレンタインデイといつのはモテない男子高校生からしたらただの拷問のような日だ。最近は女子は渡す相手がないこと『友チョコ』とかいう姑息な手段に逃げる、あれはあり得ないくらいに腹立たしい。あまりの胸のムカつきに嘔吐しかけたくらいだ。

「リア充く ファツキン！」

そんなことを叫んだとしてもそれは負け犬の遠吠えと嘲られる、嘲るのは友チョコに逃げた女子が大半だ。連中は自分の卑怯を棚に上げてモテない男子を視線や陰口で貶めるのだ、陰険極まりない。

だが、どこかが苦しい言い訳に聞こえるのはモテない男子連中だつてはつきりと自覚している。悲しいが、モテない事実は変わらない。そのクセ、バレンタインデイ当日になるとそわそわしている自分を冗談抜きで殺したくなる。

「死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい……」

かくいう俺も教室に到着したら机の中に入っていた何かの紙らしきものに過剰反応して短い間ではあつたがドキドキしてしまった愚者の一人である。ちなみにその紙らしきものといつのは昨日自宅に持ち帰り忘れた数学の課題プリントだった、本当に死にたい。

いや、意識しないよ。うつむいていても意識しちゃうんだって、学校全体でピンク色の雰囲気をかもししだしているんだからさ。つていうかピンクの雰囲気の出所の連中は誰だよモテない男子みんなに土下座しうやクソ野郎！

「やばい、数学もヤバイのになんだか吐き戻まで……」

俺は、いじだきよりへい石田恭平は走つて男子トイレへと向かつ、その途中で女子やリア充共の心ない視線やいわれのない誹謗中傷が聞こえた気がした。バレンタインデイといつこともあってなんだか心がいつもより早いペースで傷ついていくような気もある……

「ウオツ……ゲロエツ！」

激しく便器の中に吐瀉物をぶちまける俺、元々ストレスに弱い俺はよく吐く。小学校の時は定番通りゲロに関するアダ名をつけられたりしていた。悲しいがそれは田を反らすことのできない真実である。

中学に上がつてすぐからだつたか、勝手に体が大きくなつたおかげでそんなひどいことはなくなつたが他校から同じ中学校に入学して

きた女生徒からひびく恐がられた。でかいという理由だけでな。

元来の俺の性格がわかつた女子共はあろうことか俺のことをウドの大木だとかでくのぼーだとか言い出す始末、俺は怒り狂つたがそこは男子として、紳士の本性が残つていたのか絶対に手は出さなかつた。

未だにトラウマとして心の傷が残るくらいにひどいことを言われたりもしたがそれすらも我慢してみせたせいで中学では『真の漢』だとかいう称号を戴き、全学年の全男子から崇められたりもしたが女子はますます俺のことを冷たい目で睨み続けた。

とにかく俺は異性に嫌われる、理由はさっぱりわからない。誰に聞いても同じ答えが帰つてくるだけ、本当に謎なのだ。誰に対しても当たり障りのない接し方をする委員長でさえも同じことを毛嫌いしていた。

「ハアハア……」

便器の水の中で漂つ朝食をもつたいなさそな目で見る、今朝は早く起きてしまつて（理由は聞いてくれるな）時間が余つたからたくさん食べておいたのだがこれで全てパーだ。体がでかい分、俺は早く腹がすく。きっと一時限田くらには机にぴったりくつついで干物になつていることだらう。そんな干物になつている俺を見て冷たく嘲笑する女子たち……また吐きたくなつてきた。

「死に、たいなあ……」

誰かが言つていたような気がする、人類は男女がほぼ1:1の比で

構成されていて、ムカつくことに半分は相手候補がいるわけだから
どうにかして相手を見つける、というそんな話。

単純な話、俺は全人類の半分から敵視されている、簡潔に言うならば嫌われているということだ。いや、男でだって俺のことを嫌っている奴は多少はいるだろうから俺は全人類の過半数から嫌われてことになる。大げさに思われるかもしれないが俺が今まで歩んできた負の女つ気に溢れる人生を回想していったら……納得しかけない。

「うう、うう……」

女は「男が泣くなんてみつともない！」とか言いながら自分は恥ずかしげもなく泣く、そこんところどうなんだと思うのだが今の俺にはそんなこと関係ない。ただただ自分の情けなさに涙するしかない状況なのだ。

始業の予令が成り響く、どうやら朝のＳＨＲは丸々すっぽかしてしまつたらしい。俺は渋々戻りたくもないピンク教室に戻るため個室から出た。当然誰もいない、校舎もこつだつたらいいのにとあり得ない希望を抱きながら口をすすぐ、男子トイレから出ると真っ正面に俺の敵がいた。敵視されている女子とばったり出くわしてしまったのだ。

「あっ、すみません」

不快な表情に染まつた不細工な顔を見たくないから迅速にその女子の脇を抜けていく。ひどい女子になるとこれだけの行為でも嫌悪感を隠すことなく不快感を露にする輩さえいるのだが……ハハツ、どうしてこんなに嫌われるんだろうなあー俺つて。ルックスは中下だけど絶対にこの学校でビリつてわけじやないはずなのになあー……

「あ、あのー」

なんだろ?、幻聴が聞こえる。よっぽど体調が悪いらしい、そいえばなんだか熱っぽい。よし、このまま保健室へ直行してしまおう。授業もサボれるしバレンタインデイのピンク雰囲気を味あわなくても済むんだからまさしく「石」鳥……

「いっ、石田恭平つー先輩……」

あーあー、幻聴とはいえついには自分の名前に先輩つてつけちゃつたよ。さみしいなーこりや、部活にも委員会にも入つてない俺がそんな風に先輩つて呼ばれることなんて、しかも今聞こえてる幻聴みたいにかわいい女の子の声に言われるなんて今後の人生においては精々社会人になつてからじやないとあり得ないはずなのに……末期なのかなあ……

「あ、あのー!聞いて欲しいことがあるんですつー!」

ずいぶんとしつこい幻聴だ、こんなに長時間幻聴に話しかけられた経験は全人類の中で俺しかいないに違いない。ハハツ、リア充共からなんだかわからないが一步リードしてやつた気分だぜ。

「お願いしますっ！私の話を聞いてくださいっ！」

「おいおい、いくらなんでもしつこすぎやしないか？俺はこれから保健室に行つて保健室の先生が記入する保健室カードに書かれている質問に答えなきゃいけないんだ。俺は保健室の常連だから質問に答えることにあまり時間はかかるないはずだけど俺は保健室の先生にも嫌われているから互いに不愉快な時間ひ短い方がいい、だからさつと保健室に行きたいのにこの幻聴つたら、もう……！」

「しつこいんだよーどうせすぐ忘れるんだからとつとと消えちまえー！」

と、背後を振り返りながら怒鳴る。するとなんだろう？「ちょうどグットタイミングでいただけだろ」と思われる俺の背後にいた女子はなぜだかその言葉が自分に浴びせられたものであるかのように悲しそうな表情を浮かべていた。

「あつ、『めんなさい』……唐突でこんなしつこくされたら、不愉快ですよね……」

「……？」

現状が全く飲み込めてない俺が呆けて立っていた、そして眼前には今にも泣き出しそうな女子。こんなに困ってしまうシチュエーションは初めての経験、まさしく初体験。

「……」

「これーはーまずい！全く状況が飲み込めていない」というのに修羅場のまつただ中っていう危機的状況！またしても吐き気が俺の背筋をゾクゾクと襲つたがまた悠長に嘔吐している暇はない、とにかくこの女子から距離をとらなければっ！

「う、うう……」

泣かれたあーーーこの女は俺に何を求めてるんだよちくしょうーーーっていうか周囲の視線が痛い、今の時間帯はそれぞれの授業を受ける教室に移動する時間だから当然人通りは多い、っていうすぐ多い。こつこつも泣き出したくなるくらいに。

「お、おいー泣くなつて！」

「ごめんっ、な、さいい……ひうっ……」

「……！……あー、もうっー！」

俺は周囲から注がれる好奇と憎悪と白い視線に耐えかねてその女の手首を掴んだ、すごく細くて白い。強く握りすぎたら折れてしまい

そうだ。

「来いつ！」

「えつ？ひやあつー？」

まるで人扱いだ、俺はその女の手首を掴んだままの状態で人が少ない場所まで走ることにして人ごみを駆け抜けた。こうなると完全に無我夢中というやつで止まらないし止まれない、周囲からの誹謗中傷なんて耳にも入つてこなかつた。

「ハアっ、ハアっ……」

「石田先輩、つて……」

「こんな状態でしゃべられても、答えられんから……」

自分で勝手に引っ張つて連れてきておきながらひどいぐさだと思つた、つていうか女子と何の偏見も憎悪もなんらかの負の感情を抱かれずに話すのつて、これまた初体験だ。

「石田恭平さん、ですよね」

「……ああ」

か、かわいい……。こんなにかわいい女の子からこんなに『頼託』のない笑顔を向けられる経験は今後ないかもしれない、つていうくらいにかわいい。網膜に焼き付けてでも脳内フィルターに保存しておかねばなるまい。

「先程は失礼しました、石田先輩を前にしてちょっと緊張してしまつて……」

「？なんで緊張？」

嫌悪感でか？」こつ本当に気持ち悪いみたいな感情で緊張なんかするのか？

「だ、だつて……」

俺は聞いてはいけないことを聞いてしまつたのが、女の子は急にどうまきしだす。俺なんかを相手にしながらドキドキすることなんてないはずなのに、なんでだ？

「なんだよ、モジモジしてないで早く言えよ」

うわっ！女子に対して全く免疫がないから簡単にひどいこと言つてしまつた！また泣かれたらどんなリアクションしていいかわからんね

一ぞ。

「わ、私！中田亮子なかたりょうこつていいます！石田先輩せきだせんぱいのこと、好きです！付つれ合あわせつてください！」

「…………？」

「どうやらこの子は異国のお人だつたらしい、何を言つているのが全くわからなくなつてしまつた。それとも神様が人間が地球を我が物のように無縫に扱つているからバベルの塔の時みたいに言語を乱したのかな？やばいなー、これからどんな風に生活していけばいいんだろう？とにかくジョンスチャーからかな…………？」

「め、迷惑ですね……初対面の人間にそんな」と言われても……

「……」

ボケタイム終了、考察タイム開始、つていうところか？なんだか俺は今まで体験したことがないくらいに幸せな状況にいるらしいぞ？

「迷惑じゃない、けど……」

何を話したらいいかわからないまま口を動かしたからじどうもどろになつてしまつ、舌がことんもつれまくつてしまつてなんだかム

ズムズしてしまつ。でも不思議と今までのよつよつ吐き氣は込み上げてこなかつた。

「迷惑じゃないんだが、こんな風に人に好きとか言われたりした経験がないから、なんて受け答えしたらいいのかわからないだけなんだ。気を悪くしないでくれ」

「よ……よかつたあ……」

女の子はホッとしたようで胸に手を当ててその場にへたりこんだ、どうやら大きな両目には溢れんばかりの涙が貯まっていたらしくホツとしたせいで気が弛んだのかボロボロと大粒の涙を溢し始めた。

「よかつたあ……嫌われなくてよかつたあ……」

込み上げてくる嗚咽を抑えきれないのか、亮子はへたりこんだまま泣き出した。俺は自分の目の前で異性に泣かれるだなんて珍しいシチュエーションに出くわしたことなんか一度もないから戸惑うことしかできない、とにかく手の震えを抑えながら亮子の頭を撫でてみた。すげえ、髪の毛がここまでツヤツヤの人間がこの世にいるんだ。

「あ、ありがとうございます……グスン……」

亮子はなかなか幼さが残るなりに端整な顔が台無しになるくらいに顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた、生来の泣き虫なのかもしけない。

「落ち着いたか……？」

「はい……」

……なんだか俺の一挙一動がリア充っぽくなっているような気がする！頭とか撫でる以前に生まれて初めて母ちゃん以外の女に触れた！何コレ奇跡みたいだ！

「石田先輩……」

「……！」

さすがに今のは動搖が表に現れてしまったことと思う、なんてたつてかなりの美少女が上目遣いで両目をウルウルさせながらこっちを見ているのだ。動搖ビビリか興奮しないわけがない。

「すみません、こんなに迷惑をおかけして……授業までサボらせてしまって……」

「……」

授業をサボらせたのは完全に俺なのでなんだか心が痛いがそこは黙つておこう、ロマンチックな、そういうピンク色の雰囲気を壊しかねないからな。

「亮子、だつたけ？」

「はつ、はいっ！」

いきなり下の名前で呼ばれたからか、亮子はかなり驚いているようだつた。どうやら異性に対して免疫がないのは亮子も同じらしい、それを知った俺はちょっとだけだが気が楽になつた。

「なんで俺なんかと、その……付き合いたいと……？」

「こ」でそこらの物陰から「大成功！」なる看板を持った人間がニヤケ面しながら出てきたら一発で人間不信になつたことだらうがさすがにそんなことはなかつた。亮子はまたしてもモジモジしながら「ニヨゴニヨ」と話しだした。

「やっぱり覚えてるわけ無いですよね……だいぶ前に助けてもらつたことなんか……」

「……あ」

驕氣だがわざかに頭の片隅に転がつていた記憶の欠片を拾い上げる、さつきも言った通り俺はなぜだか不本意ながらも中学校では完全に男子だけから英雄扱いされていて、どれだけガラの悪い不良にも一目置かれていたのだ。

街中でその知り合いの不良が誰かにからんでいたりしたら出来るだけ声をかけるようには心がけている、からまれているのは主に女性なのだがその大半は俺を見ると不愉快な表情になる（助けてあげたつていうのに！）。

そんな身勝手極まりない扱いを受けまくつていたなかで、誰だつたかはほとんど覚えていないのだがいたのだ。きちんと頭を下げて俺に礼をした、そう亮子くらいの大きさで見た目もそつくりな……

「あの時の、は……亮子、だつたのか……！」
「…覚えててくれたんですね！」

亮子は太陽のように瞳を輝かせて俺を見上げる。あまりの眩しさに目を背けてしまいそうになつた。

「あの時すごく嬉しくて……一度お礼がしたつて思つてずっと石田先輩のこと考えてたら日に日に先輩のこと好きになつちやつて……」

思いの丈をぶつけまくる亮子の表情は幸せそつた。今まで溜め込んできた感情を吐露することができ清々しい気分なのだろう。俺は俺みたいな嫌われ者の目の前で嬉しそうに微笑んでいる亮子の頬を、込み上げてくる感情を抑えることができなくなつて、少しだけ触れた。

「ふえつーーー？」

亮子は猫が突然人間にちょっとかいを出された時のようにビクッと体をすくめる。俺も似たように手を引っ込めると二人の間にはなんだか気まずい沈黙が流れた。

「ご、ごめん……」

「わ、私も大きい声出しちゃって……」

「……」

「……」

すくなく静かだつた。すぐ側の運動場で行われているのであらう体育の授業を受けている生徒の騒がしい喧噪がすごく遠くに聞こえるくらいに、静かだつた。

「いいですよ……？」

深すぎる沈黙を破つたのは、亮子の小さなためらいがちな声だつた。

「さ、触つてもいいです……石田先輩になら、触られたいです……」

右手を、亮子の頬に伸ばす。亮子自身がいいと言っているが、俺にはこのまま触れてしまつてもいいものなのかわからなかつた。

「やわらかい……」

ついそう口に出してしまつくらいに亮子の頬は柔らかかつた。軽く触つただけなのに簡単に指が沈んでいく、俺が亮子の頬に手をやりながらほんやりとしている間、亮子はずつと恥ずかしそうな表情をしていた。

「石田、先輩つ……恥ずかしいです……」

亮子は小動物のように震えながらそう言つたが俺だって恥ずかしい、心臓は亮子の耳に直接鼓動が聞こえてしまつんじやないつていうくらいにドキドキしていた。

（わ、悪くない、かも……）

これがリア充の気分といつやつなのか、だとしたら悪くないかもしない。今までの姿勢をあつさり変えてしまつことはちょっととかつこわるく感じたがそんな中途半端なプライドは田の前で俺に対して頬を赤らめている亮子を犠牲にするに足るものなのか？

「り、亮子……」

震える声をなんとか抑えようとするがやつぱり多少は震えてしまつ、それでも乾く口の中を僅かにぱかし残つてゐる唾液を総動員してどうにかしゃべれるようにする。一、二回ほど肩で呼吸してから亮子の頬から肩に手を移した。

「……！」

俺のいきなりの大胆な行動に亮子はびっくりしている、俺は亮子が落ち着くまで少し待つてからまた呼吸し直した。

「付き合いつて話、こちらこそよろしくお願ひします」

「……つひとつつ……！」

亮子の顔が真っ赤に染まり、ボンッ！といつ音がした。マンガみたいに大げさなリアクションだった。

「ほ、ほほほほ本当にいいんですかっ！！？」

「うん、俺はまだ亮子のことはよく知らないけど……ちょっと付き合つていろいろうちに亮子のこと好きになれるかもしれないから」

「うっ、あっ、うううう……」

亮子はまたしてもその場にしゃがみ込んで泣き出す、かなり大胆になつていた俺は亮子の頭を優しく撫でてみた。

「あっ、あうう……ありがとう」やれこまますうう……」

「亮子はけつこう泣き虫なんだな」

もし、何も知らない女子が目の前で泣いていたら俺はうつとうしそうな視線をそいつに向かうことだろう。だが、今俺の目の前で嬉しく泣きしているのは亮子だ、俺のこと好きと言つてくれた、亮子なのだ。

現金なことだが、急に人生が薔薇色に見えてきたぜ。

（後書き）

「」を見てモテないからと書いて卑屈になつてゐる青少年が前向きになつてくれたら幸いです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9686q/>

たとえモテなくとも朝日は昇るんだぜ、覚えとけ

2011年4月29日11時37分発行